人見東原遺跡

1998

松井田町埋蔵文化財調査会

序

松井田町は群馬県の西端に位置し、長野県軽井沢町に隣接する緑豊かな町であります。県境には上信国境をなす碓氷峠や入山峠の険しい山並みが連なり、関東と中部の分水嶺となっています。このような立地ゆえ本町の歴史は「峠越えの歴史」でもあります。古くは石器の材石である黒曜石が運ばれ、古代には東山道、近世には中山道、そして国道18号、上信越自動車道が、また鉄路では日本一の急勾配を運行し続けた「碓氷線」の廃止と新幹線の開通など、松井田の歩んできた道は正に「道」の変遷とともにあったと言えましょう。

さて、ここに報告いたします「人見東原遺跡」は、古墳時代初め頃の人々の営みの一部です。悠久の昔、ここを居住の地とした人々は何故、何処からやってきたのでしょうか。私達は何故ここにいるのか、その答えはこのような一つ一つの調査の積み重ねで見えてくるものと言えます。本報告が地域の歩みを解明する一助として、広く活用していただければ幸いと考える次第であります。

最後に、調査に携わっていただいた作業員の方々をはじめ、報告書刊行に至るまでご協力をいただいた関係各位にお礼を申し述べ、序とさせていただきます。

平成10年１月

松井田町埋蔵文化財調査会
会長　内田武夫

例　言

1．本書は、群馬県碓氷郡松井田町大字人見1946他に所在する人見東原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、民間施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。

3．調査は、松井田町教育委員会内に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会が実施し、現地での調査は山武考古学研究所に委託した。調査担当は同研究所員・山崎悟である。

4．調査は、平成８年10月９日～同11月15日にかけて実施した。調査面積は約1,670㎡である。

5．本書の編集は、松井田町埋蔵文化財調査会の指導の下、山武考古学研究所が行い、長井正欣が担当した。整理作業には青木千賀子、山崎、半澤利江が従事した。執筆分担は以下の通り。

Ⅰ：田口　修（松井田町教育委員会）

Ⅱ・Ⅲ：長井・山崎（山武考古学研究所）

Ⅳ・Ⅴ：半澤（山武考古学研究所）

なお、遺構写真・遺物写真は山崎が撮影した。

6．調査に関わる資料は、一括して松井田町教育委員会が保管している。

7．発掘調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただいた。（敬称略）

荒木勇次　若林正人

株式会社ボルテックスセイグン　東日本重機

新成田総合社　開成測量　文化総合企画

8．発掘調査参加者は下記の通りである。

松本芳　桜井慎三　中山寅夫　斉藤はる江　堀木けい子　山越梅子　岩井ひで　土屋キミエ　杉木はま子　萩原登巳司　尾高トシ子　吉本律子　増田栄一　増田トヨミ　田村綾子　浦野美奈子　松本てる子

目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……3

Ⅲ　調査の方法と経過……3

Ⅳ　遺構と遺物……4

Ⅴ　まとめ……10

写真図版

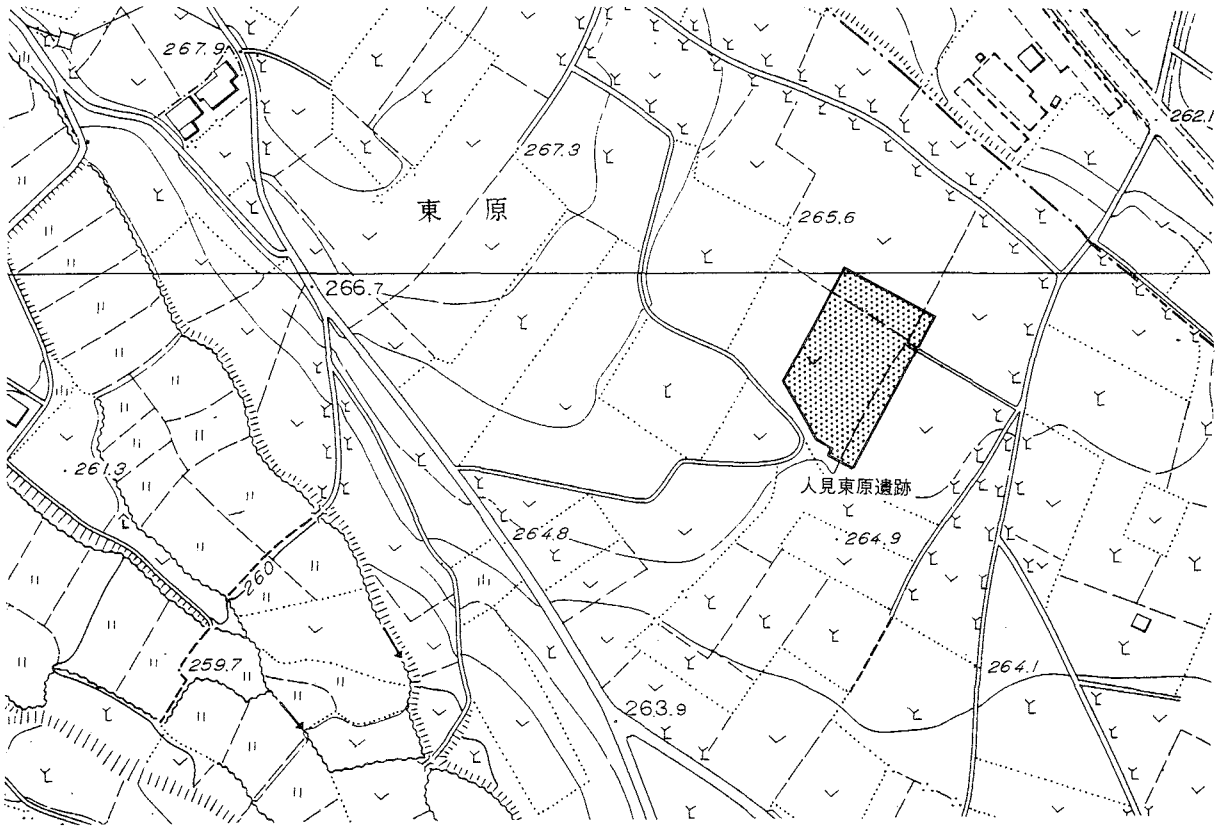
Ⅰ　調査に至る経過

平成７年４月、株式会社ボルテックスセイグン（以下、業者という）より松井田町に、町の地域開発指導要綱に基づき、開発行為に関する計画協議書が提出された。町開発委員会が町各部局に意見を求めるなかで教育委員会（以下、教委）からは、「埋蔵文化財確認調査が必要である」との回答であった。

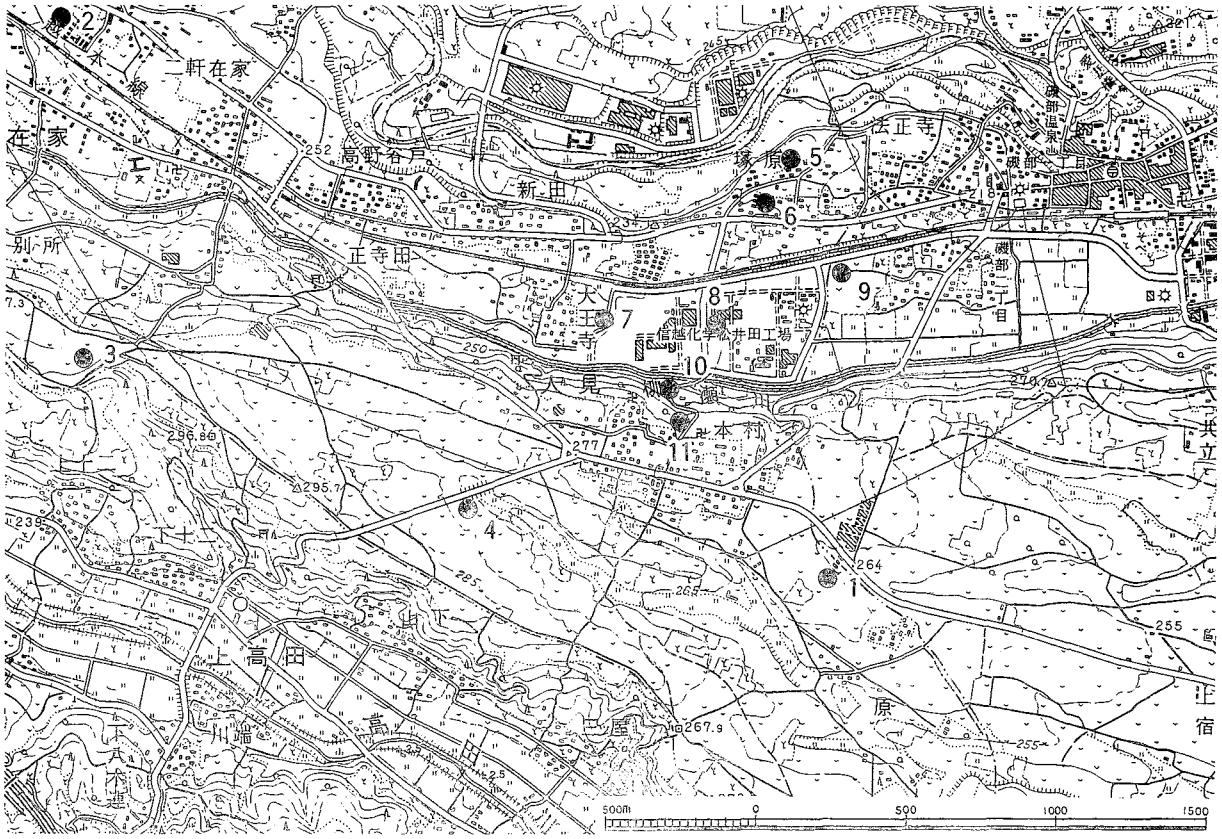
これを受け、平成８年６月３日付で業者より教委へ、埋蔵文化財確認調査（表面）依頼書が提出された。６月５日の調査の結果、遺跡地の可能性が大であり、事前の試掘調査が必要であると考えられたため、教委より業者宛にこの旨を回答（６月11日付）した。その後、６月24日付埋蔵文化財確認調査（試掘）依頼書により７月１日から９月６日（中断含む）まで試掘調査が実施され、当該地域が古墳時代初頭期の遺跡地であることが判明した。

教委からの同日付結果報告書における「文化財保護のための協議要請」を受け、９月９日に教委と業者との間で協議がなされたが、ここでは、開発計画の変更は不可避であること、発掘調査により記録保存を図ること、調査は教委内に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会で実施すること、等を確認した。

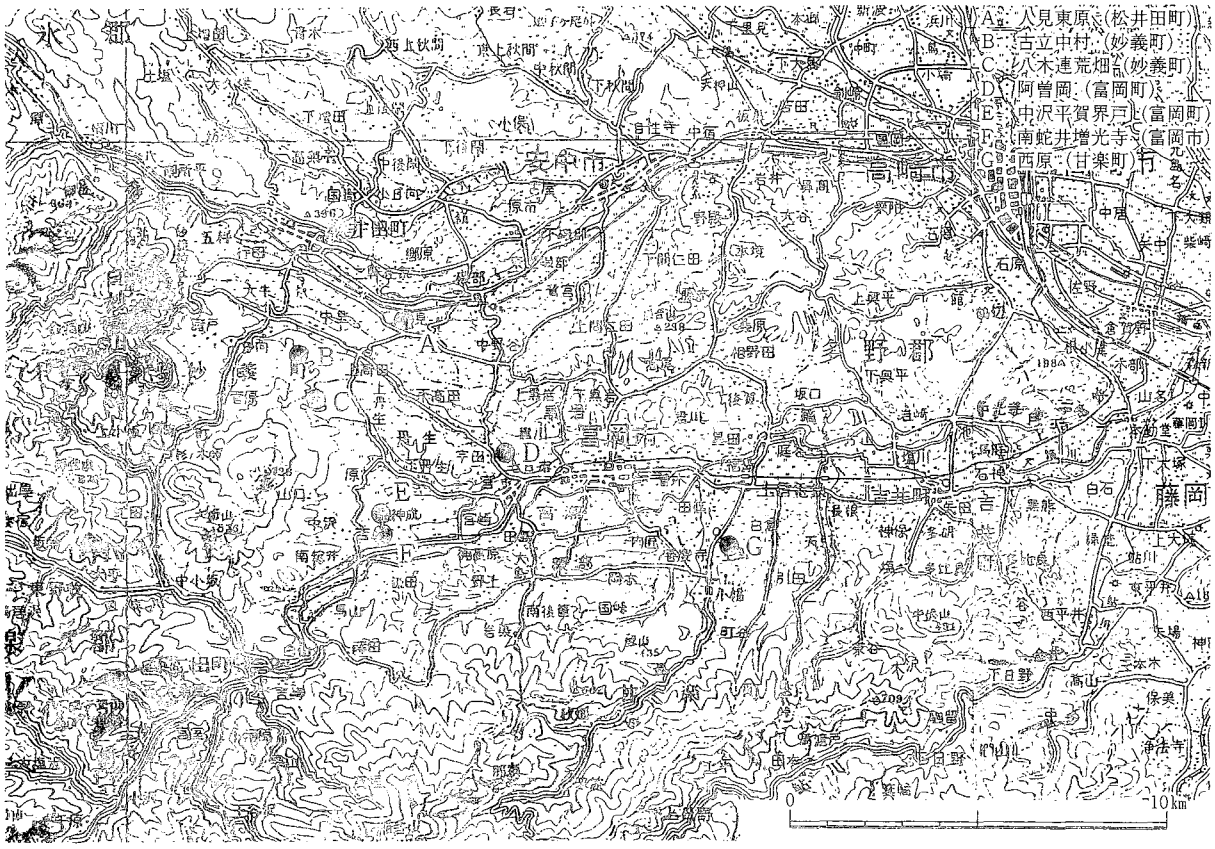
その後、調査範囲や経費、期間等について数回の協議を重ね、関係法令の手続きを経て、10月８日付「埋蔵文化財発掘調査等委託契約書」の締結をもって翌10月９日より調査が開始された。



第１図　遺跡の位置　（松井田町役場 NO.30, S＝1：2,500）



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡　（国土地理院２万５千分の１「松井田」）



第３図　樽式系・吉ヶ谷（赤井戸）式系の折衷土器出土遺跡　（国土地理院20万分の１「長野」）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

本遺跡は、松井田町の南東端部、JR磯部駅から南西1.6kmの距離に位置している。遺跡の西方約7kmには妙義山が偉容を示し、山稜からは西横野丘陵が帯状に南東へと延びる。本遺跡はこの丘陵の中央部付近、標高265m前後の地点に立地する。西横野丘陵は碓氷川・高田川間の丘陵で、碓氷谷と甘楽郡・鏑谷との分水嶺でもある。丘陵の北側・碓氷川右岸には河岸段丘が発達し、また、丘陵の南側・高田川左岸にも河岸段丘が形成され、同段丘の南側は急峻な段丘崖となっている。

本遺跡周辺には、次のような遺跡が知られている（括弧内数字は第2図に対応）。

西横野丘陵上には本遺跡(1)・二軒在家別所(3)・上人見(4)などの遺跡がある。二軒在家別所遺跡は縄文時代中期の濃密な遺物包蔵地であり、上人見遺跡は弥生時代前期末葉の土器が発見されたことで著名である。碓氷川右岸段丘上には、二軒在家東光寺(2)・塚原古墳群(5)・人見法正寺(6)・松井田工業団地(8)・人見北原(9)・人見谷津(10)などの遺跡のほか、中世の城跡である大王寺城(7)・人見城(11)がある。塚原古墳群は10数基の小円墳群で、その内の一基は前方後円墳の可能性が指摘されている。松井田工業団地遺跡では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居跡約450軒などが調査されている。

なお、本遺跡では樽式系と吉ヶ谷（赤井戸）式系との折衷的な土器が出土しているが、同様の遺物が出土している遺跡は碓氷川以南から鏑川沿いにかけての地域に散見される（第3図）。

Ⅲ　調査の方法と経過

（1）発掘調査

本遺跡は、松井田町教育委員会の試掘調査結果から古墳時代初頭期の小規模な集落跡と想定されていた。

発掘調査では、各遺構の構築状態・埋没状態の観察・記録を行った。遺物は、出土状態が把握できるように、図面・写真に記録した。

各遺構の原図は、平面図・土層図・エレベーション図を1/20縮尺で、炉跡については1/10縮尺で作成した。

写真撮影は調査の過程で随時行い、白黒6×7判・白黒35mm・カラースライド35mmの3種類のフイルムを使用した。

調査経過の概要は以下の通りである。

平成8年10月9日～：表土除去を行う。同29日：1号・2号住居跡の掘り下げ。同30日：1号・2号住居跡から炉跡を検出。同31日～：3号住居跡の調査を開始する。11月11日～14日：各遺構の調査を継続し、遺構実測・写真撮影等を行う。同15日：現地における発掘調査の全工程を終了した。

（2）整理調査

整理調査は、発掘調査で得られた図面・写真・遺物を整理し、各遺構・遺物の状態が客観的に把握できるように資料化することを主目的に行った。また、調査報告書においては、周辺遺跡との比較を通して、本遺跡の性格付けを試みた。

出土遺物は、すべて水洗い・注記を行った。注記に際しては次のような略号を用いた。

人見東原遺跡……ＭＨＨ　　住居跡……Ｈ

整理調査は、平成9年11月中旬から同12月下旬にかけて実施した。

Ⅳ　遺構と遺物

（１）概要

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡３軒である。出土遺物には樽式系の土器・吉ヶ谷（赤井戸）系の土器・両者の折衷的な土器・古式土師器等がみられることから、古墳時代初頭期を遺構の構築時期と判断した。

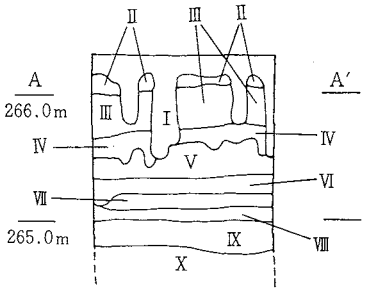
遺構外のＢ６グリッドから当該期の甕（第８図）が出土しているが、前述以外の遺構・遺物は皆無であった。

本遺跡は、古墳時代初頭期に限定された小規模集落と考えられる。

（２）標準堆積土層　（第４図）

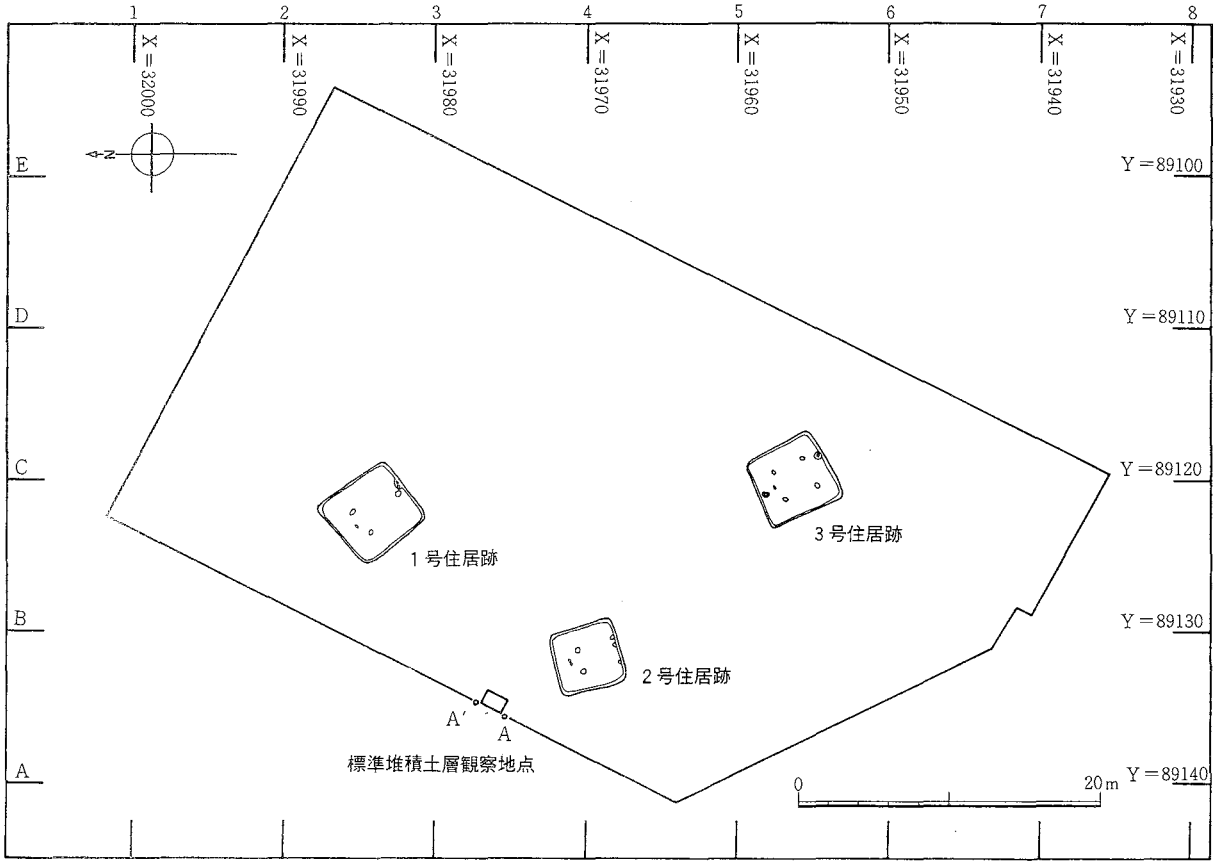
各遺構はⅣ層（暗褐色土）上面で確認された。トレンチャーによる耕作がこのⅣ層中にまで達しており、各遺構の上層にも影響を及ぼしている。

Ⅵ層はローム層で、Ⅷ・Ⅸ層はＹＰ層（浅間－板鼻黄色軽石、約13,000～14,000年前）である。なお、肉眼観察の限りでは、浅間Ｂ軽石（1,108年）や浅間Ｃ軽石は確認できなかった。



Ⅰ：表土　浅間Ａ軽石を含む。
Ⅱ：黒色土　しまり強い。粘性ややあり。
Ⅲ：暗褐色土　しまり強い。
Ⅳ：暗褐色土　しまり強い。
Ⅴ：暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまり強い。
Ⅵ：黄褐色土　ローム層。
Ⅶ：黄褐色土　ロームブロック・ＹＰを少量含む。
Ⅷ：黄褐色土　ＹＰ（径～10mm）層。
Ⅸ：黄褐色土　ＹＰ（径～30mm）層。
Ⅹ：淡褐色土　しまり強い。粘性がある。

第４図　標準堆積土層図



第５図　調査区全体図

（３）住居跡

１号住居跡　（第６図）

位置：Ｂ２グリッド。**長軸方位**：Ｎ－40°－Ｗ。**平面形態**：長方形。**規模**：5.15ｍ×4.84ｍ。**床面積**：24.14㎡。**残存深度**：68㎝。**壁の状態**：良好。勾配角80°前後。**床面**：特に硬化した面はみられなかった。**壁周溝**：検出されなかった。**柱穴**：主柱穴２本。**炉跡**：長軸上やや北西寄りに浅いくぼみがあり、炉の枕石と思われる長楕円形の礫が出土した。焼土・灰等の堆積は明瞭に確認されなかった。**貯蔵穴**：南東壁中央やや東寄りに0.60ｍ×0.35ｍ、深さ23㎝の不整形のプランを呈する土坑を検出したが、貯蔵穴とは断定できない。**掘り方**：確認されなかった。**埋没土の特徴**：YP・炭化粒・ロームブロックを含む暗褐色～黒色土。**備考**：住居跡西側の床面付近から、炭化材が検出されている。材質などは不明。

遺物出土状態：少量の遺物が散在するような状態で出土している。中央付近より小形椀１点、南側隅付近の床面より甕の口縁～胴上半部が出土している。埋没土中からはＳ字状口縁台付甕の口縁部片、小形器台、赤色塗彩された鉢の破片、その他小片が出土している。

遺物：甕２点以上、壺１点、小形椀１点、小形器台１点、鉢１点、礫５点。掲載遺物７点。

２号住居跡　（第７図）

位置：Ａ４グリッド。**長軸方位**：Ｎ－15°－Ｗ。**平面形態**：正方形。**規模**：4.19ｍ×3.96ｍ。**床面積**：15.90㎡。**残存深度**：59㎝。**壁の状態**：良好。勾配角75°前後。**床面**：特に硬化した面はみられなかった。**壁周溝**：確認されなかった。**柱穴**：５基のピットが確認されているが、主柱穴は北側の２本と考えられる。柱痕は認められなかった。**炉跡**：北側柱穴間やや壁寄りに位置する。２か所の浅い掘り込みが確認され、焼土の堆積がみられた。南側は0.60ｍ×0.35ｍの不整三角形で、床面からの深さは７㎝。北側は0.36ｍ×0.40ｍの不整楕円形で、床面からの深さは６㎝。南側に枕石と思われる礫２点をつなげるように配していた。また、内部に２基の小ピットが検出されたが、性格については不明である。**貯蔵穴**：確認されなかった。**掘り方**：確認されなかった。**埋没土の特徴**：YP等を含む暗褐色～黒色土。**備考**：南東及び北東部分の床面付近から、炭化材が検出されている。材質などは不明。

遺物出土状態：北壁際付近の床上から蓋及び甕の口縁部～胴部にかけての破片が出土した。また、炉の西側から鉢と思われる破片が出土している。南壁近くの床から壺の胴上半部が倒立した状態で出土している。その他埋没土中から土器片が出土している。

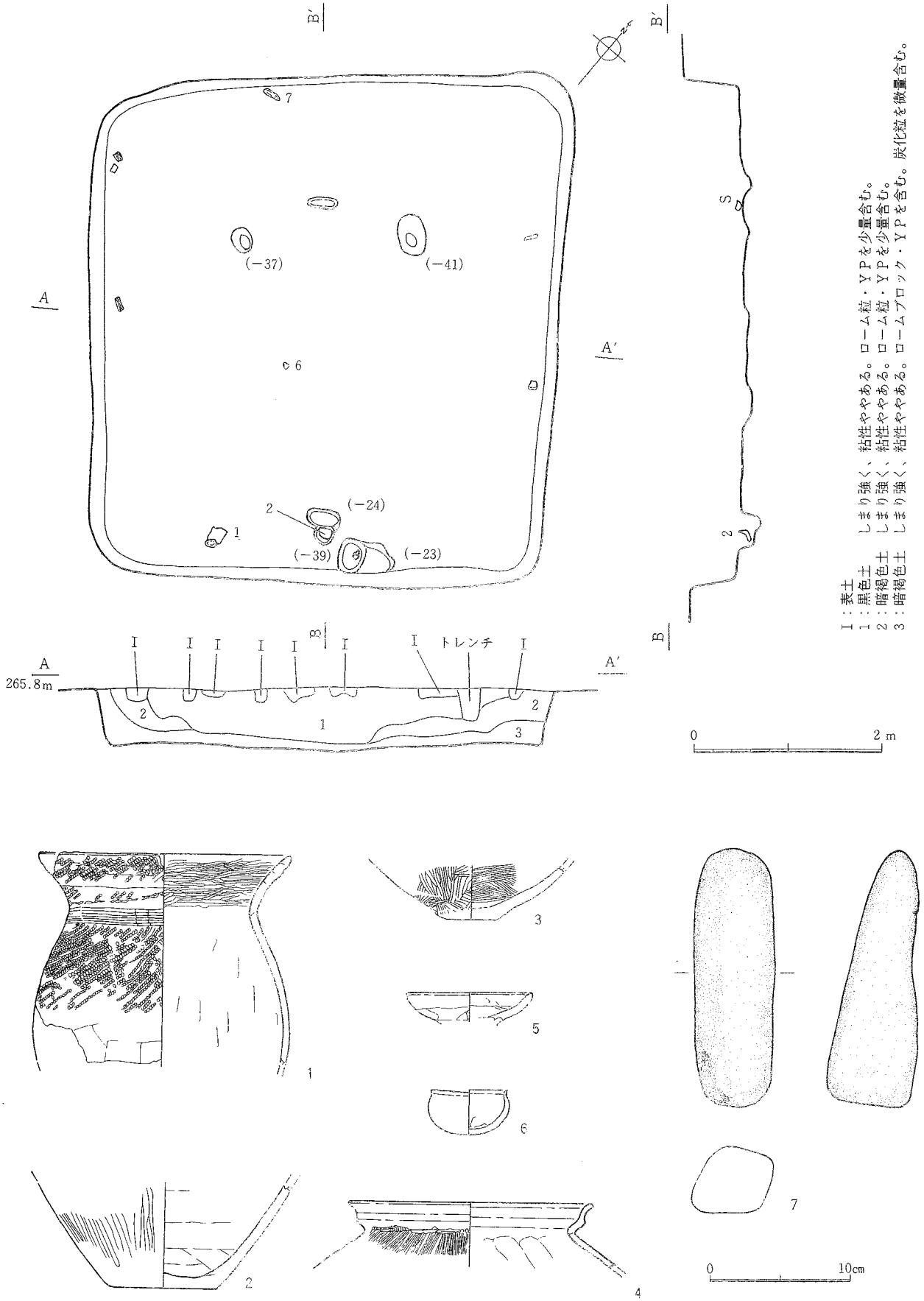
遺物：壺１点、蓋１点、甕１点以上、鉢１点、礫３点。掲載遺物４点。

３号住居跡　（第８図）

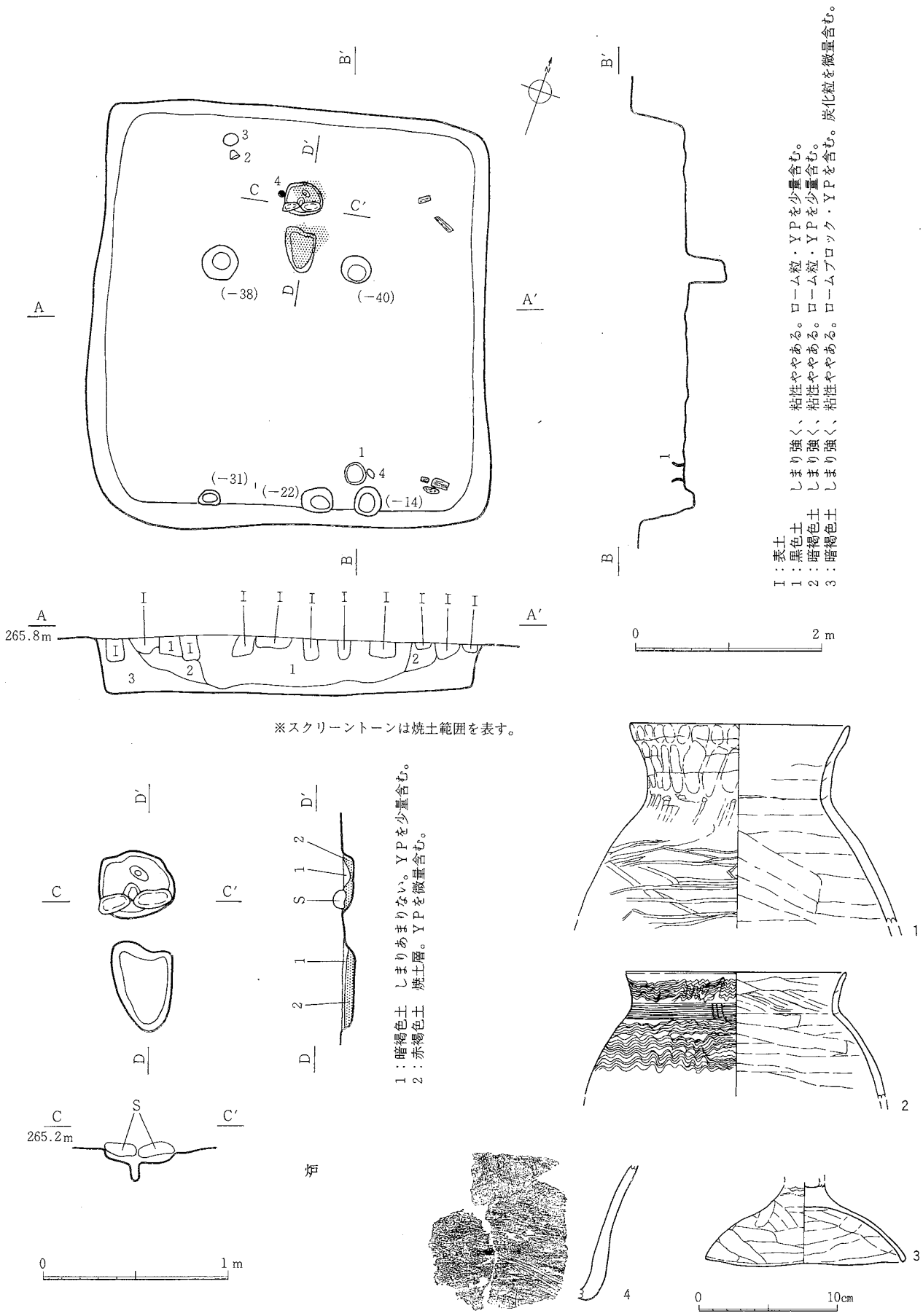
位置：Ｂ５グリッド。**長軸方位**：Ｎ－25°－Ｗ。**平面形態**：隅丸長方形。**規模**：5.00ｍ×4.64ｍ。**床面積**：22.22㎡。**残存深度**：63㎝。**壁の状態**：70°～80°の角度で立ち上がる。**床面**：特に硬化した面はみられなかった。**壁周溝**：確認されなかった。**柱穴**：主柱穴４本が検出されたが、柱痕は確認されなかった。**炉跡**：掘り込みや焼土は確認できなかったが、北側柱穴間から出土した扁平な石は枕石と思われる。**貯蔵穴**：南壁中央やや東寄りに50㎝×50㎝、深さ79㎝の円形のプランを呈する土坑が確認された。**掘り方**：確認されなかった。**埋没土の特徴**：YP・炭化粒・ロームブロックを含む暗褐色～黒色土。

遺物出土状態：床面から鉢破片、貯蔵穴から甕の胴上半部が逆位の状態で出土している。

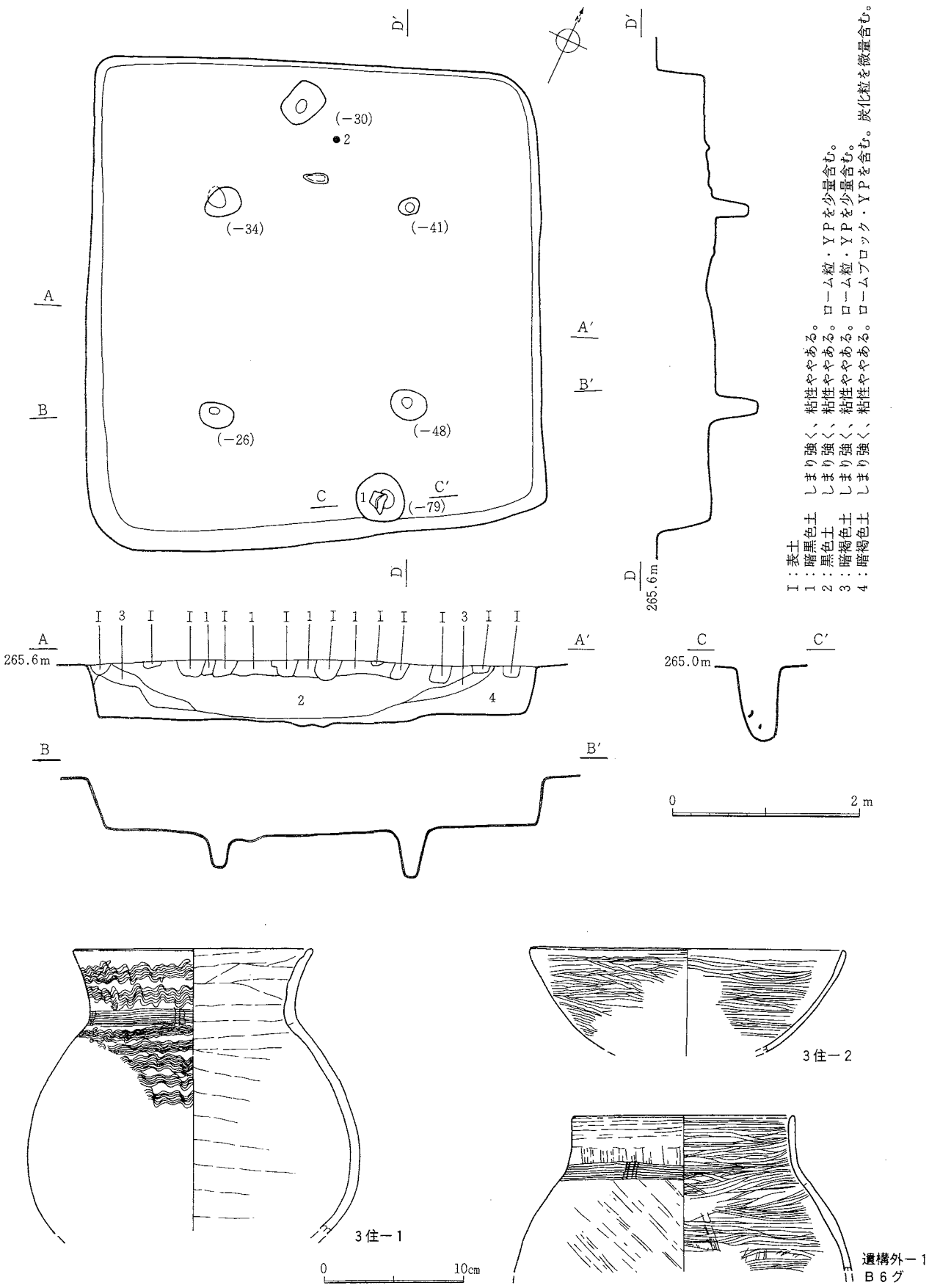
遺物：鉢１、櫛描波状文の施される樽式系の甕１点、礫１点。掲載遺物２点。



第６図　１号住居跡と出土遺物



第７図　２号住居跡と出土遺物



第８図　３号住居跡と出土遺物・遺構外出土遺物

遺物観察表

1号住居跡　（第6図）

番号	器種	器高・口径・底径(cm) 残存　器厚(cm)	器形・成形・整形等の特徴	①色調　②胎土　③注記 ④備考
1	甕	―・(18.5)・― 口縁～胴部片　0.5	口縁部外反する。胴部最大径推定18.6cm。口縁部に一部輪積痕を残す。外面、口縁部・胴部上半単節LR縄文、頸部に櫛描簾状文、胴部下半ナデ。内面、口縁部ヘラ磨き、胴部ヘラナデ。	①にぶい黄橙10YR6/3②長・英・角・赤褐粒③4④部分的に煤付着
2	(壺)	―・　―　・7.6 底部　1.0	外面、縦方向基調のヘラ磨き。内面、ヘラナデ。	①にぶい黄橙10YR6/3②粗砂粒・長・英・角③3
3	鉢	―・　―　・3.5 体部下半片　0.5	口縁部を欠損するが、底部から内湾気味に口縁部に至ると推定される。内外面ヘラ磨き。	①にぶい黄橙10YR7/3②長・英・角③フ④内外面赤彩
4	S字台付甕	―・(17.5)・― 口縁部片　0.4	口縁端部は丸みを持つ。内面の屈曲弱い。口縁部、内外面とも横方向の木口状工具によるナデ。外面、頸部以下ハケ目（10本／2cm)。	①にぶい黄橙10YR7/3②雲母・長・英・角③フ
5	小形器台	―・　9.0・― 器受部　0.5	器受部中位に弱い稜を有し、口縁部やや内湾する。器受底孔を有すと思われるが欠損のため不明瞭。器受部下半ヘラ削り、上半ナデ。内面ナデ。	①橙5YR6/6②長・英・角③フ
6	小形埦	3.3・　5.2・― 3/4　0.3	丸底。体部丸みを持ち、頸部わずかに括れ、口縁部短く外傾。内面、口縁部に稜を持つ。内外面ナデ。	①にぶい黄橙10YR7/3②長・英・角③5④黒斑あり
7	礫	長さ18.5 幅5.8 厚さ 6.1 重さ983.1g	1広面は磨られて平滑になっている。端面には敲打痕がある。	③8 石材：安山岩

2号住居跡　（第7図）

番号	器種	器高・口径・底径(cm) 残存　器厚(cm)	器形・成形・整形等の特徴	①色調　②胎土　③注記 ④備考
1	壺	―・16.0・― 胴部下半欠損　0.8	口縁部外反気味に開き、端部やや内湾する。外面、口縁部に縦方向の指頭痕、頸部にヘラ先状工具による縦方向の押引線をめぐらせるが、輪積痕が残る。胴部上半ヘラナデ・雑なヘラ磨き。内面ヘラナデ。	①浅黄橙10YR8/4②長・英・角③1
2	甕	―・(15.9)・― 1/6　0.5	口縁部、短く外反。外面、口縁部に櫛描波状文、頸部に簾状文3連止め、胴部ヘラナデ後、肩部に波状文3段。内面、丁寧なヘラナデ。	①にぶい橙7.5YR7/4②長・英・角・赤褐色粒・白色粒③3
3	蓋	―・14.5・― つまみ端部欠損　0.4	丸みのある天井部から内湾気味に口縁部に至る。外面、ヘラ削り・ヘラナデ。内面ヘラナデ。	①明黄褐10YR6/6②結片・長・英・角③2
4	(鉢)	破片　0.6	あるいは高坏片か。内外面とも木口状工具によるナデを施すが、整形は粗雑で条痕状に残る。	①にぶい黄橙10YR7/4②長・英・角③4・5

3号住居跡　（第8図）

番号	器種	器高・口径・底径(cm) 残存　器厚(cm)	器形・成形・整形等の特徴	①色調　②胎土　③注記 ④備考
1	甕	―・17.2・― 口縁～胴部　0.8	胴部膨らみ最大径24.1cm。口縁部外反する。外面、口縁部に櫛描波状文2段（一部3段)、頸部に簾状文3連止め、肩部～胴部上半に波状文5段、以下ヘラナデ。内面、ヘラナデ。	①にぶい黄橙10YR7/4②長・英・角③1④胴部下半は黒色を呈する
2	鉢	―・(14.1)・― 1/6　0.4	体部～口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともヘラ磨き。	①にぶい黄橙10YR7/3②長・英・角・白針③2

遺構外　（第8図）

番号	器種	器高・口径・底径(cm) 残存　器厚(cm)	器形・成形・整形等の特徴	①色調　②胎土　③注記 ④備考
1	甕	―・15.8・― 口縁～肩部　0.5	口縁部は長く直立気味。外面、ヘラナデ後、頸部に櫛描簾状文3～4連止め。内面、ヘラ磨き。	①灰黄2.5Y6/2②長・角・白色粒③B6グ

〈略号〉 長……長石　英……石英　角……角閃石　結片……結晶片岩　白針……白色針状粒（海綿骨針）　フ……覆土（埋没土）
グ……グリッド

Ⅴまとめ

今回の調査で検出された古墳時代初頭の３軒の住居跡は、形態において次のような類似性が認められる。①平面形態は長方形または正方形を呈し、長軸は北～北西方向を指向する。②壁周溝及び掘り方が確認されない。③炉は長軸線上の北寄りに位置し、掘り込みは浅く、南側に枕石を配する。④３軒中２軒において、主柱穴は北側に２本確認されたのみで、南側では対応する柱穴は検出されない。

これらの内、①～③については、弥生時代後期～古墳時代初頭の他の遺跡でも共通して見受けられ[1)]、時期的な特徴といえる。④については、本来４本柱穴であった可能性も否定できないが、本遺跡あるいは本地域の特徴である可能性もあり、今後、類例を検討したい。

出土遺物は、樽式土器の系譜を引く土器群と吉ヶ谷・赤井戸式土器の系譜を引く土器群の共伴、さらに両者の折衷的な文様構成をもつ甕、吉ヶ谷・赤井戸式土器の形態的特徴を持ちながら、文様を欠き、古式土師器の影響が看取される壺等、複雑な様相を呈する。

１号住居跡からは、口縁部～胴上半部に縄文を施し、頸部に櫛描簾状文を持つ甕が床面から出土している。さらに、埋没土中から赤色塗彩された鉢、Ｓ字状口縁台付甕の口縁部片が出土している。他の遺構との重複もないことから、本遺構に属すると判断される。Ｓ字台付甕は、外面肩部の横ハケの有無は不明だが、頸部内面の横ハケの消失、厚みのある口縁部などから比較的新しく位置付けられる可能性もある[2)]。

２号住居跡からは、櫛描波状文・簾状文施文の甕とともに、口縁部に明瞭な輪積痕を残す無文の壺が出土している。前橋市・荒砥地域の赤井戸式土器と古式土師器の混在する遺跡では、赤井戸式土器の縄文施文が消失する方向に型式変化するという指摘[3)]があり、本遺跡においてもほぼ妥当な状況といえる。

３号住居跡出土の甕は、文様構成において樽式土器の系統を踏襲するものであるが、古式土師器の影響も看取される。構築時期は１号住居跡よりも若干先行する可能性もあるが、検討する出土遺物が少なく、即断はできない。

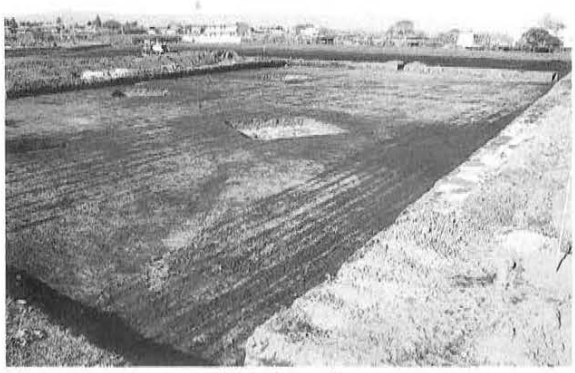
本遺跡では、当該期以前の遺構が皆無の中に突如出現し、集落を造営する。弥生時代末～古墳時代初頭の社会的な混乱は当地域でも例外でなく、本遺跡地に居住を開始した人々はそうした中で樽式系と吉ヶ谷・赤井戸式系という２つの異なった文化を併せ持ちながら、古式土師器を受け入れていった集団と想定できる。そしてこの集落は後続せず、これ以降の遺構も全く検出されていない。当地が集落を営むには適していなかったためと考えられるが、弥生時代後期～古墳時代初頭には、鏑川流域では丘陵上に小集落が点在するという指摘[4)]があり、水系は異にするものの本遺跡もそうした遺跡の一つである可能性が高い。

《註》

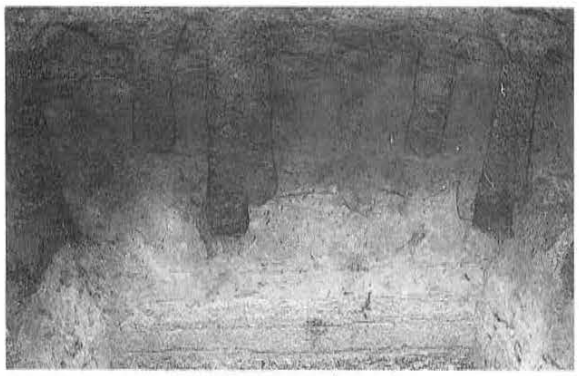
1）妙義町遺跡調査会　1990　『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』
　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992　『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』
　甘楽町遺跡調査会　1994　『天神Ⅰ遺跡・天神Ⅱ遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡』
　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996　『中沢平賀界戸遺跡』
　富岡市教育委員会　1997　『東八木遺跡、阿曽岡・権現堂遺跡』
2）高崎市教育委員会　1981　『元島名将軍塚古墳』
3）小島敦子　1995　「古墳時代初頭の出土土器について」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
4）若林正人　1991　「東国における前期古墳の出現過程－群馬県鏑川流域の古墳出現前夜の様相」『研究紀要』８，群馬県埋蔵文化財調査事業団

《参考文献》

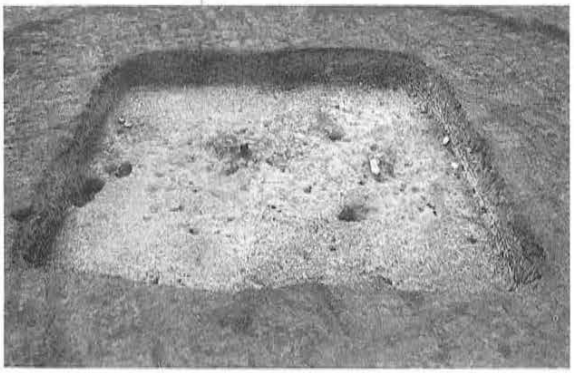
飯島克己・若狭　徹　1985　「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻９号
若狭　徹　1990　「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』VOL.１，群馬土器観会
友廣哲也　1991　「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』VOL.２，群馬土器観会



全景（S→）

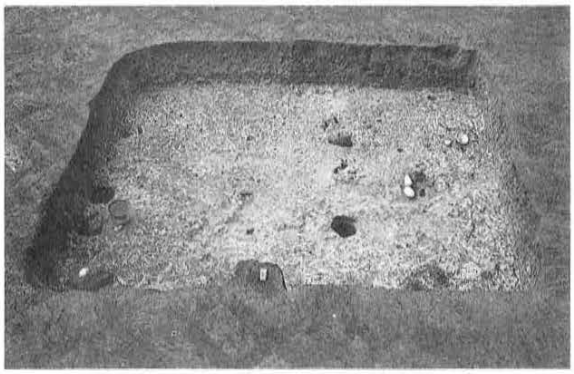


標準堆積土層（E→）



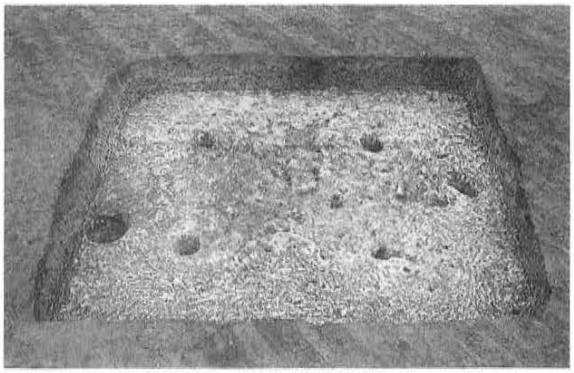
1号住居跡　遺物出土状態（E→）

1号住居跡・炉跡（NW→）

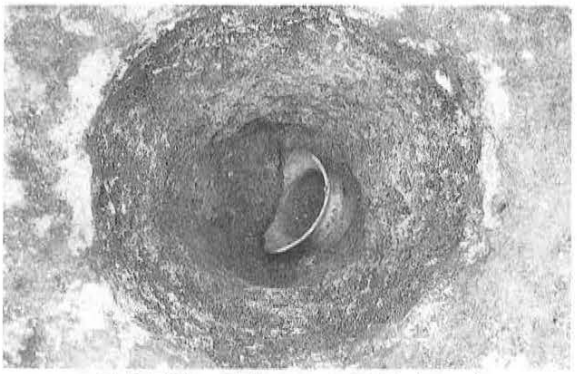


2号住居跡　遺物出土状態（E→）

2号住居跡・遺物 NO. 1 近景（E→）

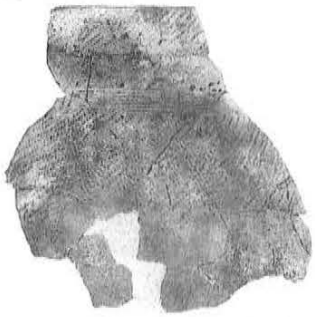


3号住居跡　遺物出土状態（E→）



3号住居跡・遺物 NO. 1 近景（N→）

PL 2


1住－1

1住－2

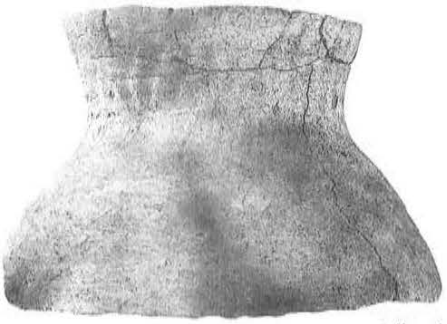
1住－3

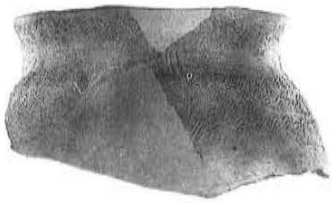
1住－4

1住－5

1住－6

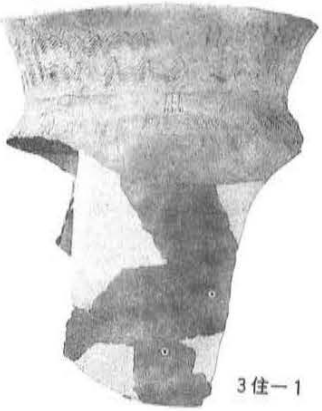
1住－7


2住－1

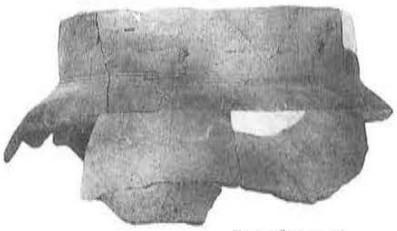

2住－2

2住－4

2住－3


3住－1

3住－2


B 6グリッド

1住－1　拡大写真

2住－1　拡大写真

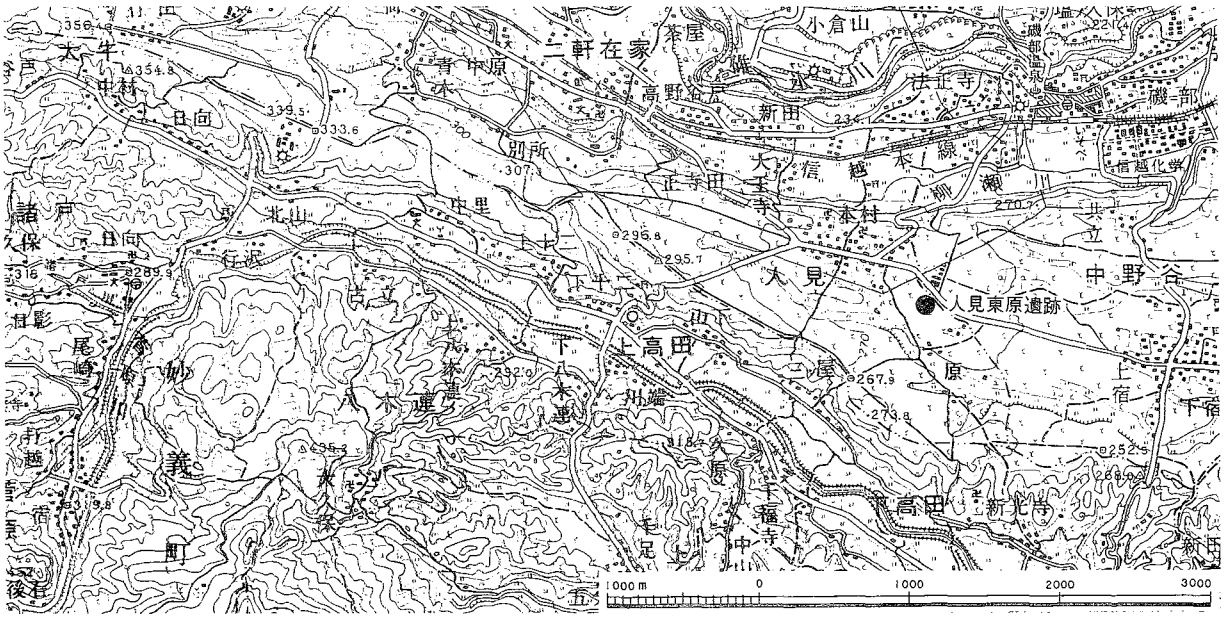
出土遺物

抄　　録

フリガナ	ヒトミヒガシバラ　イセキ
書名	人見東原遺跡
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書
シリーズ番号	9
編著者名	田口　修、長井正欣、半澤利江、山崎　悟
編集機関	山武考古学研究所／〒286 千葉県成田市並木町221番地　☎0476-24-0536
発行機関	松井田町埋蔵文化財調査会／〒379-02 群馬県碓氷郡松井田町新堀245番地（教育委員会内）☎0273-93-1111
発行年月日	西暦1998年1月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
人見東原遺跡（ヒトミヒガシバライセキ）	群馬県碓氷郡（グンマケンウスイグン）松井田町大字（マツイダマチオオアザ）人見（ヒトミ）1946	10401	9	36°17′02″	138°50′31″	19961009 19961115	1,670㎡	民間施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
人見東原遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡　3軒	樽式系土器、吉ヶ谷（赤井戸）系土器、土師器	樽式系・吉ヶ谷系の折衷的な土器が見られた。



抄録図　遺跡の位置　（国土地理院5万分の1「富岡」）

ABSTRACT

Title of this book	Hitomihigashibara site
Editor and Writer	Osamu Taguchi, Masayoshi Nagai, Toshie Hanzawa, Satoru Yamazaki
Editorial office	Sanbu Archaeological Reserch Institute ／221, Namiki-cho, Narita city, Chiba Pref.
Publishing office	Matsuida Town Investigating Association ／245, Niibori, Matsuida town, Usui country, Gunma Pref.
Date of publication	January 30, 1998

Site's Name	Location	Municipality Code	North Latitude	Duration	Investigation area	Cause of Investigation
Hitomi higashibara	1946, Ohaza Hitomi, Matsuida town, Usui country, Gunma Prefecture	10401 9	36° 17′ 02″	19961009 19961115	1,670m²	construction work of a private establishment
			East Longitude 138° 50′ 31″			

Site's Name	Sort	Chief Period	Structural Remains	Chief Artifacts
Hitomi higashibara	settlement	Kofun period	pit dwelling……3	ware (series of Taru type, Yoshigayatsu or Akaido type) ,haji ware

人見東原遺跡

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈9〉

印刷　平成10年1月25日
発行　平成10年1月30日

編　集　山武考古学研究所
発　行　松井田町埋蔵文化財調査会
印　刷　㈱文化総合企画
TEL (0476) 93-0593